書　評・紹　介

岡田久美子著
『岡田久美子写真集　フィールドノート　余映』
自費出版（光村印刷発行、Bee Books）、1999年、B5判変型、総46頁

前著『フィールドノート　余滴』をいただいて、岡田さんらしい内容に「ああ、やはり――」と頷くところがあったのだが、つづいての今回の『――余映』、前著に重ねての彼女らしさが遺憾なく発揮され、一見軽そうな書ながら圧倒される。

一に写真。写真集なのだからそれが良いのは当然だとはいうものの、頁を繰ると“地理”写真としての好作品が次々と現れる。夫妻での、あるいは友人との精力的ともいえる回を重ねた旅の成果としての旅写真の数かずの中から精選された40数葉、漏れたものにも良いものがあることと思われる。

二には解説文。100字余の短文ながらその地を語り、情景を述べ、書かれざることをも推測させる余韻を残す。元来、彼女の文章は時にウィットに富み、頬をゆるめさせるものがあるのだが、この書のなかでは例えば「少女戯傘」「クレオパトラの道」など。

三に“一字題”。これは、彼女の平素からの“漢字”に対する関心と素養を示すもので、余人には至難の技。平易そうに見えもするが、前著でも示されたこの素養が今回も更に難度を上げ、なるほどと感心させられる。例えば「屹」「虔」「省」など。

更にこの素養を一見さりげなくではあるが、決定的にみごとに披瀝しているのが、序に示された“漢詩”。約束ごとのやかましい作詩法をクリアするだけでなく、「野帳余映」の4字を頭に詠み込むという離れ業をやってのける才能。まさに脱帽！

学業を畢えてから、我々の年代ははや数十年。在学中に学んだこともちろん骨肉にはなっていようが、個々の技をどのようにグレードアップするかは各人の関心の有りようと精進によることを示す好例といえようか。

ただ一つ、強いて難点をあげるならば、文初が詰まっているものと、1字落としになっているものとが統一されていないのが眼につく。出版社から助言があって然るべき。しかし、四項に絞って挙げた美点によってこれは蚊の足跡のようなもの。

［石田　裕子］

エドワード・レルフ著
『都市景観の20世紀――モダンとポストモダンのトータルウォッチング』
（高野岳彦・神谷浩夫・岩瀬寛之訳）筑摩書房、1999年、A5判、3,200円、総308頁

タイトルからどんなにビジュアルな中身かと期待に胸を膨らませて本書を開くと，その期待はおおいに裏切られる．建築の分野で出版されている『○○ウォッチング』は建物の様式，美しさ，ディティールを余すことなくアピールする，豊富な写真で構成されている．しかし，この本ではレルフが撮った写真についてはお世辞にも上手とはいえないし，被写体に対して淡泊な姿が伺える．だが，レルフがこの地味な本で主張したかったのは「全体的な見方」なのだ．カメラのファインダーを覗くレルフの目は，目立つ建物を追うのでなく，ファインダーという枠で切り取ったものを様々な視点を設定して見ようとする．彼は自分の立場をスペシャリストではなく，ゼネラリストであり，このゼネラリストの見方はかっこわるいアプローチであるが，顕微鏡や計量経済モデルと同程度のその有効性を発揮すると明言する．「一つの視点だけから景観や都市を理解しようとするのは，人間の足の形や食事文化の詳細な研究から人間の全体像を記述しようとするのに似ている」と彼は語る．彼が被写体に一定の距離を置こうとするのは，全体を意識していることのほかに，都市や建造物の作り手ではなく，あくまでも実感的な景観のユーザーの立場で見ようとする姿勢の現れでもある．